大東文化大学大学院中国言語文化専攻
『中国言語文化学研究』第13号（2024）

中国語可能補語の日本語訳について
―“V得/不得”を例として―
A Study on the Japanese Translation of Chinese Potential Complements
—Using "V *de/bude*" as an Example—

韓　樹坤
HAN　Shukun

内容提要：本文以汉语可能补语形式“V得/不得”为研究对象，首先将其从语义分类角度分为“能力可能”“属性可能”“条件可能”“许可可能”，然后基于该语义分类，结合语料对这一可能补语形式在表达不同语义时与日语可能表达形式的对应情况进行考察。结果表明：“V得/不得”在表达“能力可能”“属性可能”“条件可能”时，多对应日语的可能表达形式；而在表达“许可可能”时，多与日语的其他表达形式对应。由此可见，汉语在表达“可能”含义时，语言形式较为单一；而日语在表达“可能”含义时，除了可能表达形式之外，还可根据语境，使用其他表达形式，语言形式较为丰富。这与汉日两种语言的性质与特点以及使用者的语言习惯不同有关。

キーワード：可能補語　V得/不得　日本語訳　対応関係

目次

1　はじめに
2　“V得/不得”の意味分類について
3　考察
4　おわりに
参考文献

1 はじめに

中国語の可能補語は「可能」という意味を表す文法構造として、文法研究の焦点となっている。現代中国語では、可能補語については、一般に“動詞＋得/不＋趨向補語/結果補語”と“動詞＋得/不＋了”、そして“動詞＋得/不得”という三つに分類している。例えば、“买得/不起”“做得/不了”“去得/不得”などはそれである。これらの可能補語は日本語に訳されると、日本語の可能表現に対応する場合と対応しない場合とがある。しかし、具体的にどのような場合に対応し、どのような場合に対応しないのか、それはなぜなのかについてはほとんど研究がなされていないようである。そのため、本研究では、“動詞＋得/不得（V得/不得）”を例に、その意味分類を分析した上で、日本語の可能表現形式との対応関係を考察

する。これによって、中国語と日本語の可能表現の類似点と相違点について明らかにし、可能補語の翻訳研究および言語教育研究に有益な知見を提供することができる。

2 “V 得/不得”の意味分類について

“V 得/不得”の意味については、王力（1954）、吕叔湘（1982）、房玉清（1992）、李宗江（1994）、刘月华等（2001）など、すでに多くの研究がある。その中で、王力（1954）と房玉清（1992）では、“V 得/不得”の“得”は“能”と類似しており、“去得/不得”の意味は“能/不能去”の意味とほぼ同じであると指摘しているが、吕叔湘（1982）では、“V 得/不得”は“能”の意味を表す場合よりも、“可”の意味を表す場合が多いと述べている。一方、李宗江（1994）では、“V 得/不得”を“V 得/不得$_1$”と“V 得/不得$_2$”とに分けている。具体的に言えば、“V 得/不得$_1$”はある動作・行為の実現可能性を客観的に報告し、それが実現するかどうかに対する話し手の主観的な態度は含まれていない。それに対し、“V 得/不得$_2$”はある動作・行為が引き起こす結果に基づいて結論を導き出し、それが実現するかどうかに対する話し手の主観的な態度、つまりそれの実現することを期待するかしないかは含まれている。例えば、

(1) 这里的公路的内侧是悬崖，外侧是深谷，要上上不去，要下下不得。（李宗江 1994:376）ここの道路の内側は崖で、外側は深い谷だ。上に上ることもできず、下に降ることもできない。（筆者訳）

(2) 木棉树那里太危险，去不得。（李宗江 1994:376）
パンヤの木のそばは大変危険で、行ってはいけない。（筆者訳）

例 (1) では、動作・行為を示す動詞の“下”の実現を期待しないという話し手の主観的な態度が見られないのに対し、例 (2) では、動作・行為を示す動詞の“去”の実現を期待しないという話し手の主観的な態度が明瞭である。

また、刘月华等（2001）では、“V 得/不得”の意味を「主観的または客観的な条件によってある動作を実現できるかどうか」と「情理から許されるかどうか」に分類している。例えば、

(3) 他倒在太师椅上，半天动弹不得。（刘月华等 2001:592）
彼は太師椅に倒れこみ、半日も身動きできなかった。（筆者訳）

(4) 这个人你可小看不得。（刘月华等 2001:593）
この人は軽視してはいけない。（筆者訳）

例 (3) では、動作主体が動かないという状態になる主観的または客観的な条件が示唆されているのに対し、例 (4) では、人を軽視することが情理から許されないことが表されている。

しかし、これらの研究は“V 得/不得”の意味について十分な説明がなされていないので、改めて検討する必要がある。本研究では、以上の分類をもとに、“V 得/不得”の意味を「能力可能」「属性可能」「条件可能」「許可可能」という四つに分類する。具体的に言えば、“V 得/不得”は有情物の能力（本来備わった能力と習得した能力を含む）だけではなく、無情物の一般的な属性・機能・価値によって実現できるかどうかをも表すことができる。また、動作主体の意志や能力とは関係なく、ある事柄が何らかの条件や

周囲の状況、規則などから許されて実現可能かどうかを表すこともある。その上で、コーパスに基づいて、“V 得/不得”の日本語訳について詳しく考察し、その背後にある原因などを検討する。なお、日本語では、「五段動詞の可能動詞」「サ変動詞語幹＋できる」「動詞連体形＋ことができる」「動詞未然形＋れる・られる」などのような可能表現は形式上の違いがあるものの、「能力可能」「属性可能」「条件可能」「許可可能」などの意味を表すこともできるので、中国語の可能補語との対応関係を考察することも可能である(渋谷勝己 1986、張威 1998、中井政喜・呂雷寧 2014 などを参照)。

ところで、“懂得(分かる)”“认得(知っている)”“晓得(分かる)”“值得(値打ちがある)”などのような肯定表現は、対応する否定表現は“不懂得(分からない)”“不认得（知らない）”“不晓得(分からない)”“不值得(値打ちがない)”であり、「可能」の意味素性が弱いと思われる。また、“恨不得(～したくてたまらない)”“怪不得(なるほど～わけだ)”“顾不得(～する暇もない)”“巴不得(切望する)”“算不得(～とは言えない)”“哭笑不得(泣くに泣けず笑うに笑えず)”などのような否定形式だけがある言葉および“记得/不得(覚えている/覚えていない)”“了得/不得(大変だ/ものすごい)”“舍得/不得(惜しまない/惜しむ)”などのような肯定・否定形式両方ともある言葉はそれぞれ既に慣用語として固定され、可能の意味もあまりないので、今回の分析では、これらの例は考察に含めないこととする。

3 考察

3.1 コーパス資料

本研究で使用するコーパスは『中日対訳コーパス』(第1版、2003) である。このコーパスは、北京日本学研究センターによって開発され、約 2000 万文字の中日対訳の平行コーパスを収録している。格納されたデータは中国国立図書館と北京日本学研究センターの図書館に所蔵されている小説、散文、伝記、詩、政治論文、法律関連書籍などの日中対訳本である。

3.2 能力可能

“V 得/不得”は「能力可能」を表す場合、“能 V”と同じであり、日本語の可能表現に訳されるのが一般的である。例えば、

(5) 他再起来慢慢地走，仍然支撑不得。(鲁迅《呐喊》)
彼女はまた立ちあがって、ゆっくり歩き出したが、やはり持ちこたえられない。(松枝茂夫・和田武司訳『吶喊』)

(6) 静珍本想再冲出去，无奈一上床便只觉得四肢如铅头如斗，似乎被钉在了三块铺板上，身不由己，一动也动不得窝。(王蒙《活动变人形》)
静珍はすぐにも飛び出して行きたかったが如何せん、床に就くや全身が鉛のように重くベッドに張りついて、ピクとも動かせない。(林芳訳『応報』)

(7) 我简直想推开桌子，跑出门去但是我却动弹不得～我恨自己软弱～（鲁彦周《天云山传奇》)
私は今にも椅子から立って部屋をとび出そうと思ったが、動くことができなかった。～自分の弱さを憎みながら～(田畑佐和子・田畑光永訳『天雲山伝奇』)

例(5) (6) (7) では、“支撑不得”“动不得(窝)”“动弹不得”は“不能支撑”“不能动（窝）”“不能

动弹”と同じであり、全て動作主の身体的能力が発揮できないという意味を表しており、それぞれ「動詞＋れる・られる」「五段動詞の可能動詞」「動詞連体形＋ことができる」などの日本語の可能表現に訳されているので、形式上にも意味上にも、対応していると言える。

一方、日本語では、可能表現に訳されない場合もあるが、非常に少ない。例えば、

(8)她又能做，打柴摘茶养蚕都来得～（鲁迅《彷徨》）

あの女も働きもので、柴刈りでも茶摘みでも蚕でも何でもやりますから～（松枝茂夫・和田武司訳『彷徨』）

例(8)では、“来得”は“能来”の意味であり、動作主体が「柴刈り」「茶摘み」「蚕」などの仕事をする能力或いは技能が身につき、何でもできることを表している。この文では、“都来得”を「何でもやります」と訳すより、「何でもやれます」と訳したほうが適切であると考えている。

3.3 属性可能

“V 得/不得”は「属性可能」を表す場合、“能 V”と同じであり、日本語の可能表現に訳されるのが多い。例えば、

(9) “你看我做在那里的白话诗去，空白有多少，怕只值三百大钱一本罢。收版权税又半年六月没消息，‘远水救不得近火’，谁耐烦。”（鲁迅《呐喊》）

「いま書いてる白話詩をごらん。空白がいくらあるか。一冊書いてせいぜい銅貨一二百ぐらいのものだろう。その印税だって半年たっても沙汰がない。『遠き水は近き火を救えず』さ。たまったもんじゃない。」（松枝茂夫・和田武司訳『呐喊』）

(10) 山上总要放火，野兽们都惊走了，极难打到。即使打到，野物们走惯了，没有膘，熬不得油。（阿城《棋王》）

山焼きをするとき、獣たちは驚いて逃げてしまうので、なかなか捕まらなかった。たとえ捕まえたところで、山を走りまわっているため肉がしまり、脂をとることができなかった。（立間祥介訳『チャピオン(棋王)』）

例(9)では、“救不得”の主語は無情物の“远水(遠き水)”であり、主語の属性や機能などが発揮できないことを強調している。それに対し、例(10)では、“熬不得（油）”の主語は“野物(獣)”であり、主語の属性のせいで、「脂を取る」ことが実現できないことを強調している。この場合、“救不得”“熬不得（油）”は“不能救”“不能熬（油）”の意味とは共通しているが、前者の可能補語の形式を使用したほうが自然であると思われる。“救不得”“熬不得(油)”はそれぞれ「可能動詞」「動詞＋ことができる」という日本語の可能表現に訳されているので、両者が形式的にも意味的にも対応していると言える。

一方、他の表現形式に訳される場合も少しある。例えば、

（11）“文题我已经拟下了。你看怎样，用得用不得？”道统说着，就从手巾包里挖出一张纸条来交给他。（鲁迅《彷徨》）

「文題は、もう考えてある。これでいいかどうか、ひとつ見ていただこう」そう言いながら、

道統はハンケチの包みから一枚の紙を引き出して、四銘に渡した。（松枝茂夫・和田武司訳『彷徨』）

例(11)の主語は“文题”という無情物であり、“用得用不得”は“能用不能用”或いは“能不能用”と共通し、その物の利用する価値があるかないかという意味を表している。ここでは、形式上の対応を考慮せずに、意味上では「いいかどうか」と訳したのが問題ないと考えられる。

3.4 条件可能

“V 得/不得”は「条件可能」を表す場合、“能 V”と同じであり、日本語の可能表現に訳されるのが多い。例えば、

(12) 读完了晴岚的信，我坐在房里动弹不得。（鲁彦周《天云山传奇》）
晴嵐の手紙を読み終ると、私は身じろぎもせず部屋に坐っていた。（田畑佐和子・田畑光永訳『天雲山伝奇』）

(13) 既然可以“易子而食”，便什么都易得，什么人都吃得。（鲁迅《呐喊》）
「子を易えて食う」のがかまわないとすれば、何だって易えられるし、どんな人間だって食えるわけだ。（松枝茂夫・和田武司訳『吶喊』）

例(12)では、“动弹不得”は条件文に使用されて動作主体の身体的能力が一時的に発揮されない条件などを示唆している。それに対し、例(13)では、“易得”“吃得”は「易える」「食う」といった事柄の実現できる前提条件があることを示唆している。これらの“V 得/不得”構造は全て“能/不能 V”に置き換えることができ、それぞれ「五段動詞の可能動詞」「動詞連用形+れる・られる」に訳され、日本語の可能表現の機能とは共通していると言える。

一方、他の表現形式に訳される場合もあるが、それほど多くない。例えば、

(14) 我突然觉得自己可怜，说不下去了。人一老，就逞不得强了。（阿城《棋王》）
わしは急に自分がかわいそうになって、ことばがつづかなくなった。人間、年を取ると意気地がなくなるものだ。（立間祥介訳『チャピオン(棋王)』）

例(14)は、人の“逞强”という能力が発揮できる条件を示唆している。つまり、人が年をとると、身体的機能が弱くなり、“逞强”という能力がなくなってしまうということを強調している。ここでは、“逞不得强”は“不能逞强”の意味であり、「意気地がなくなる」に訳され、形式上では対応しないが、意味上では大体対応していると言える。

3.5 許可可能

“V 得/不得”は「許可可能」を表す場合、“能/可以 V”と同じであり、日本語の可能表現に訳されるのがあるが、あまり多くない。例えば、

(15) 这六个人，留校不能，回家不得，一直挨到第一个双十节之后又一个多月，才消去了犯罪的火烙印。（鲁迅《呐喊》）
この六人は、学校にも留まれないし、家にも帰れないというわけで、立ち往生したまま最

初の双十節のあと、さらに一カ月以上も待ってから、やっと犯罪の烙印を消されたのだった。（松枝茂夫・和田武司訳『吶喊』）

(16) 林公馆门禁森严，进去不得，她就披头散发，跌跌撞撞，不停地围着林家的院墙转。（杨沫《青春之歌》）

林公館の門扉が固く閉ざされて、中にはいることができないのを知ると、秀妮は髪をふり乱し、林家の塀のまわりを、よろめきながら、ぐるぐると、なん回も歩きまわった。（島田政雄・三好一訳『青春の歌』）

例(15)では、“回家不得”は“不能/可以回家”の意味であり、動作主体が犯罪した原因で、家に帰ることが許されないことが示唆されている。それに対し、例(16)では、“进去不得”は“不能/可以进去”という意味であり、外的環境が厳しいので、「入る」という動作・行為が実現できないことが示唆されている。この場合、刘月华等（2001）の指摘しているように、“V 得/不得”は常に説得、注意喚起、または警告のために使用され、補語の前の動詞が示す動作・行為を避けるべきであり、さもなければ不利な結果をもたらす可能性があるという意味を表すので、一般に否定形式のみが使われている。“回家不得”“进去不得”という“V不得”形式はそれぞれ「五段動詞の可能動詞」「動詞連体形＋ことができる」のような可能表現で日本語に翻訳することができるため、形式と意味の上では対応していると言える。

一方、他の表現形式に訳される場合が非常に多い。例えば、

（17）幸亏荐头的情面大，辞退不得，便改为专管温酒的一种无聊职务了。（鲁迅《吶喊》）

さいわい紹介者が顔のきく人だったため、くびにするわけにもいかず、爛番だけやらされる退屈な仕事にまわされた。（松枝茂夫・和田武司訳『吶喊』）

（18）可是，出头露面的事情，你万万做不得，轮到要你们这一辈出头管事的时候，自然有你的，如今却不必性急。（矛盾《霜叶红于二月花》）

いずれはお前たちがやらなくてはならないようになるのだから、やりたければその時やればいい。焦ってはいけませんよ。（立間祥介訳『霜葉は二月の花に似て紅なり』）

(19) 鲍彦山家里的跳着脚要下山去找，几个娘们拽住她不放：“去不得，水火无情啊！（王安忆《小鲍庄》）

鮑彦山の女房は足踏みしながら、山をおりて探しに行くと言いだしたが、女たちがしっかりとつかまえた。「行ってはだめ。災害は容赦ないんだから。」（佐伯慶子訳『小鮑荘』）

(20) 阿Q看见自己的勋业得了赏识，便愈加兴高采烈起来：“和尚动得，我动不得？”他扭住伊的面颊。（鲁迅《吶喊》）

阿Q は自分の手柄が賞讃されたので、ますます上機嫌になった。「和尚ならかまわんが、おれじゃいけないってわけか?」彼は、彼女の頬をつねった。（松枝茂夫・和田武司訳『吶喊』）

例(17)(18)(19)では、“辞退不得”“做不得”“去不得”は“不能/可以辞退”“不能/可以做”“不能/可以去”と同じであり、“辞退(首にする)”“做(やる)”“去(行く)”といった動作・行為の実行が情理または心情から許されないことを表している。それに対し、例(20)では、“动得”“动不得”は“能/可

以动”“不能/可以动”と共通し、“动(触れる)”という動作・行為の実行が当時の情勢や規則などから許されるかないかという意味を表している。これらの“V 得/不得”構造はそれぞれ「～わけには(も)にかない」「～なくてはならない」「～てはだめ」「～なら構わない」「～てはいけない」といった「不可能」や「禁止」などの意味を示す表現と訳され、形式の対応などをあまり考慮せずに、単に文の意味或いは語用論的意味から出発してより自然な表現で翻訳することになり、形式の上では日本語の可能表現に対応しない。

4 おわりに

本研究では、まず中国語の可能表現を意味から「能力可能」「条件可能」「属性可能」「許可可能」という 4 つのカテゴリに分類した。これに基づいて、“V 得/不得”という可能補語が日本語においてどのように翻訳されるかについての考察を行い、日本語の可能表現との対応関係を明らかにした。一般的に言えば、中国語の“V 得/不得”が「能力可能」「属性可能」「条件可能」を表す場合、それが日本語においても可能表現に翻訳されることが多く、形式的にも意味的にも対応していると言える。しかし、この構造が「許可可能」を表す場合、形式の対応をあまり考慮せずに、意味の対応だけを視野に入れ、日本語では他の表現形式に翻訳される傾向があり、日本語の可能表現に対応するとは言えない。このような違いはおそらく、両言語の言語構造、語彙の特徴および言語使用者の考え方、言語習慣など、多くの要因が共同して作用する結果であろうと考えられる。

可能補語は、“動詞+得/不得”の他に、“動詞+得/不+趨向補語/結果補語”や“動詞+得/不+了”などのような形式もある。これらの構造と日本語の可能表現との対応関係については、今後の課題としたい。

参考文献

房玉清（1992）《实用汉语语法》北京语言大学出版社

李宗江（1994）<“V 得（不得）”与“V 得了（不了）”>《中国语文》第 5 期

刘月华 潘文娱 故韡（2001）《实用现代汉语语法（增订本）》商务印书馆

吕叔湘（1982）《中国文法要略》商务印书馆

王力（1954）《中国现代语法》中华书局

渋谷勝己（1986）「可能表現の発展・素描」『大阪大学日本学報』第 5 号

張威（1998）『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお出版

中井政喜・呂雷寧（2014）「日本語における可能の意味について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第 47 号